

辞職挨拶

4月1日付をもちまして、35年間勤務しました国立療養所西多賀病院を辞職いたしました。

元院長・近藤先生の「人に、絶対的な平等は一日は24時間。8時間は睡眠、8時間は生活（食事、洗面、入浴、トイレ、通勤、等々）に必要で、後の8時間が自己実現・表現の出来る時間と考えると、好きな仕事に就かなくてどうする！君の歩む先には道標（みちしるべ）となる足跡はない。大変だろうが君が切り開いて歩む足跡が、良きにつけ悪きにつけ後輩の道標となる」との一言に身を任せ、昭和42年4月に国立療養所が重症児のお世話を引き受けると同時に奉職しました。また、元院長・湊先生の「院内には6割、院外に4割顔を向けなさい！君のなすべきことは、お金や地位等と云ったもので計れない人間の存在の尊さ、人や社会のあり方といった、障害児から得る療育理念、思想というようなものを、社会に投げかけ、啓蒙するように！」との励ましもあり、我が身の至らなさを省みず、時には厚かましく、時には押しつけがましく、発信し続けてきました。

就職当初、あまりにも個性が強く、同僚から「辞めるのが早いのは、君だな」と云われていたにも拘わらず、今日まで勤めることができたのも、重い障害があるといわれる方々に、感動し、畏敬の念さえ感じる日々であったからこそと思います。私達はお互いに理解し合おうと多くの言葉を費やしますが、重い障害があるといわれる方々のように、多くを語らずしてその存在自体で、周りの人々に人間の根元に関わること、社会のあり方を問いかける方々は他にいるでしょうか。また、皆様のように素敵な多くの人々との出会いの機会を作ってくださいる方々は、他にいるでしょうか。心から、重い障害があるといわれる方々との出会いに感謝しています。

高校の卒業文集に「我が高校生活に悔いなし！」と記した私ですが、今再び「我が仕事の35年間に悔いなし！」と云えるのも、皆様の支えの賜と、心からお礼申し上げます。

これからも障害児問題を通して得たことを、何らかの形で社会に発信し続けることができればと思っています。

メル友として、未永くおつき合い下さいますよう、お願いいたします。

(2002年04月02日記)